

学位記番号： 修士第40号
氏名（本籍）： 寺口 佐與子（滋賀県）
学位の種類： 修士（看護学）
学位授与年月日： 平成15年3月27日
学位論文題目： 肝移植術後の重症度評価と自律神経機能の関係についての検討

論文内容要旨

【背景】生体肝移植は、一般的な手術に比べて生体への侵襲が非常に大きい。そのため、周手術期のケアにおいては、豊富な経験や知識を基盤とした正確な臨床判断が必要となる。本研究は、今後症例数の増加に伴い、一定数のベテラン看護師が常駐しない移植現場の増加による看護の質の低下が予測される現状から、重症度評価の客観的指標を自律神経機能評価法により構築しようとするものである。

【目的】副交感神経機能と動脈血ケトン体比（AKBR）の相関の有無を通して副交感神経機能と病態の重症度の関係性を明らかにする。

【方法】生体肝移植術後早期の成人レシピエント30名を対象とし、移植外科領域で重症度の指標として用いられているAKBRと、自律神経機能評価法の一つである心拍変動のパワースペクトル解析より得られる副交感神経活動値との相関関係の有無をみることにより、肝移植術後の重症度を副交感神経系機能から評価することを試み、妥当性について検討した。統計学的検定には、副交感神経活動値とAKBRの相関関係では、単相関分析による相関係数を用いた。また二群間の差の検定ではMam-Whitney U検定を用いた。有意水準はいずれも5%とした。

【結果】1) AKBRの平均値は、合併症群と非合併症群間では有意差は認めず、健常人を基準とした相対的累積副交感神経系活動値の正常群と低値群間では有意差を認めた。2) 相対的累積副交感神経系活動値の平均値は、合併症群と非合併症群間とでは有意差は認められた。またAKBRの車常値群と低値群による分類でも有意差を認めた。3) 累積副交感神経系活動値とAKBRとの相関関係は、対象者全体では弱い相関関係を認めた。合併症群では強い正の相関関係を認め、非合併症群では有意差は認められなかった。また、相対的累積副交感神経系活動値の低値群では弱い正の相関関係を認めたが、正常群では、有意差は認められ

なかった。基礎疾患別では、ウイルス性肝硬変では強い正の相関関係を認めしたが、肝癌では有意差は認められなかった。

【考察】累積副交感神経系活動値とAKBRは対象者全体では弱い相関関係がみられたが、合併症群、相対的累積副交感神経活動値の低値群ではより有意な相関関係がみられた。これらは、重症度の高い状態では累積副交感神経系活動値が重症度の指標となり得ることを示唆する。しかしながら、全身状態がよい状態では、精神的ストレスなどの他の影響因子がより大きな影響を及ぼすことにより明確な相関が認められないものと推察された。

【総括】本研究の結果より仮説の正当性が検証され、累積副交感神経系活動値は重症度を示す指標となり得ることが示唆された。これにより、定量的で非侵襲的な方法を用いた看護者独自の判断による重症度の評価法を見出せ、移植看護における臨床判断の標準化の一助となりうる。